

# KAKKIN

## ニュース

2025年12月23日 発行

No.101

National Council for Peace and Against Nuclear Weapons (KAKKIN)

### 主な内容

- 韓国被爆者支援・訪問団を派遣
- 柏崎刈羽原子力発電所視察・行政表敬訪問
- KAKKIN 活動の原点と日本のエネルギー問題を考える  
 <令和7年度第2回研修会を開催>  
 ・「核兵器は安上がり」論から原子力平和利用の途へ ・「放射線被ばくと健康影響」

## 韓国被爆者支援・訪問団を派遣

KAKKIN は、10月27日（月）～29日（水）、日本で被爆し韓国に帰国して治療・療養されている方々への支援活動として、渡邊議長を団長に総勢11名を派遣した。

### ■ 大韓赤十字本社にて

#### 赤十字会員有功章「名誉大章」を受章

大韓赤十字120周年記念式典への出席はできなかった（飛行機の遅れ）が、パク・ジョンシル事務総長の取り計らいで、大韓赤十字本社にて受章することができた。

事務総長から、韓国赤十字社の120年に及ぶこれまでの活動経過や、理念に基づいた活動はKAKKINに近い活動であり「人道主義」そのものである。この120周年を機に、これからも、みんなで頑張っていきたいという決意が述べられた。



赤十字会員有功章「名誉大章」を受章



赤十字会員有功章「名誉大章」を受章



### ■ 大韓赤十字社人道法研究所セミナーに、

#### 渡邊議長と岩附専務理事が参加

原爆投下から80年の節目として、歴史を振り返り、核兵器禁止と平和に向けた連帯と協力を模索すること、また、大韓赤十字社設立120周年および、高麗大学創立120年を記念した、「国際学術セミナー」が高麗大学にて開催され、基調講演として「日本の核兵器廃絶運動とKAKKINの活動」をテーマに、渡邊議長が講演された。



講演されるKAKKIN 渡邊議長



「日韓共同声明」への双方代表者署名



福祉会館裏手の慰霊堂

### ■ 原爆被害者福祉会館を訪問

10月28日、陝川（ハプチョン＝ソウルから電車・バス移動で約4時間）にある原爆被害者福祉会館を訪問。イム・ヨンオク館長をはじめ幹部の皆さんの出迎えを受けた。

福祉会館の現状について、現在入所している方々は66名（内男性21名、女性45名）、平均年齢84歳で、高齢のため認知症や高血圧などの疾病が増加しており、対応が難しくなっていることや、日常の健康管理などについて説明があった。またKAKKINからの支援金用途について、主に低周波治療器などの医療機器や、入所者の生活に関わる備品の購入などに活用しているとの報告を受けた。その後、「日韓共同声明への双方署名」「カンパ金の贈呈」「慰霊堂での参拝」を行った。



入所者の皆さんと

## 柏崎刈羽原子力発電所を視察 柏崎市役所と刈羽村役場を表敬訪問

KAKKINは、11月6日（木）～7日（金）、総勢12名が参加して、柏崎市役所および刈羽村役場を表敬訪問し、東京電力(株)柏崎刈羽原子力発電所の視察を行なった。今回の視察・訪問を通じて、原子力発電所の現状と課題を認識するとともに、立地自治体の取り組みなどについて話を聞き、意見交換を行なった。

### 1. 柏崎市役所と刈羽村役場表敬訪問

#### (1) 柏崎市役所（櫻井雅治市長）

- ・市長を拝命して9年目となるが、私自身は一貫して原子力発電所については推進という立場ではなく、あくまで容認する立場である。
- ・また、原子力発電所よりもっといい、安全で尚且つサステナブルな発電方法があるならばシフトをするべきだと考える。
- ・容認するその理由として、原子力発電所もそうだが、資源小国である日本においては、再生可能エネルギーがまだ安定的なものになっていない現状では、日本における製造業を中心とするあらゆるモノづくり産業を支えるためには、安定的で安価な電力が必要であるという観点から容認する立場である。また、プルサーマルに関しても、少ないウラン燃料をリサイクルしながら有効に活用するという意味で認めるべきだと思っている。



柏崎市 櫻井市長から挨拶と説明

- ・また、柏崎刈羽原子力発電所は、東京に電気を送っているだけで、柏崎市にはメリットがないのではないかと間違った解釈をしている方が多いが、東北電力の女川原子力発電所・宮城県から新潟県に電気が送られてきていることや、過去に柏崎刈羽原子力発電所一号機から東北電力に電気が送られていたことも理解されていない。原子力発電の恩恵を受けている事実を知らない。
- ・東日本大震災以降、柏崎刈羽原子力発電所も稼働中止となった。一方で、現在でも安全対策工事を行っており、約5,500人の方々がそこで雇用され働いている。1号機の建設以来、一番多い人数となっている。
- ・東日本大震災の際、福島原子力発電所での事故については、私は当然、国が起こした事故であり、私も含めて国民ひとり一人が起こした事故だと思っている。原子力発電所に対して不安を持たれる方も多いが、今後の日本のエネルギー事情を考えた時、あるいは日本の産業構造を考えた時、

モノをつくるためには、エネルギーが必要であるということを含め、国への要望も提出している。

- ・5年前に一般市民の方々にアンケートを実施した。柏崎の7機ある原発をすぐに廃炉してくれという方が約19%、その他の選択肢は、7機全部稼働してほしいという方が、6%という結果であった。
- ・81%の方々は、再稼働を認めるという方々だと思っている。

#### (2) 刈羽村役場（総務課 鈴木裕市課長）

- ・刈羽村の人口は約4,200人、集落としては2集落という小さなコミュニティで成り立っている。その中で一番大事にしているのは、人と人との絆であり、地域の団結力をつなげながら行政運営を行なっている。
- ・原子力立地交付金が現在、ほぼ満額で交付されているという状況であるが、今後、再稼働がどうなるかが喫緊の課題と思っている。再稼働が行なわれないということになれば、来年度以降の交付金に影響がでてしまう。それに伴って刈羽村の整備事業等を全体的に見直ししなければならないため、安全が担保されるのであれば再稼働したいとの村長の考えもあるので、国に対しても求めていきたい。



刈羽村総務課 鈴木課長から挨拶と説明

- ・柏崎刈羽原子力発電所の5, 6, 7号機は刈羽村内に設置されており、刈羽村への経済効果として、現在停止中ではあるが、目安交付金として平成6年度で約12億円の収入があった。しかし、令和8年度については、地元の同意が取れないことで稼働しないと、みなし交付金分の68%がなくなることになり、額にして約2億円が減ってしまう見込みとなる。
- ・交付金の使途については、小学校、中学校の運営事業や、子どもたちの指導補助員の人件費・光熱費であったり、保育園の給食委託費、また、コミュニティバスの運営費、高齢者介護施設などに充当している。



1～4号機



5～7号機

## 2. 柏崎刈羽原子力発電所

### ■発電所の概要

- ・柏崎刈羽原子力発電所は、新潟県の柏崎市と刈羽村にまたがって立地しており、総敷地面積は420万m<sup>2</sup>、東京ドーム約90個分に相当する。
- ・柏崎市側に1～4号機、刈羽村側に5～7号機、合計7つの発電設備が設置されており、総出力は821万2千kWで1つの発電所としては世界最大級となっている。
- ・1号機は運転開始から40年を超え、7号機でも28年が経過している。
- ・原子炉形式は、1号機から5号機は、沸騰水型軽水炉（BWR）で6号機・7号機は、改良型沸騰水型軽水炉（ABWR）となっている。



柏崎刈羽原子力発電所 大東副所長から挨拶と説明

- ・現在、7機全基が停止している状態。6号機と7号機は、再稼働に必要な原子力規制委員会の審査に合格し、6号機はすでに再稼働するための準備が完了しているが、7号機はテロ対策施設の工事が完了する2029年8月以降の稼働を目指している。

### ■発電所内視察

- ・柏崎刈羽原子力発電所の概要や原子力発電の仕組み、安全対策などについて説明を受けた。とりわけ「安全」への取り組みとして、福島第一原子力発電所の事故の経緯と教訓を活かした取り組みについて、「事故を経験したからこそ妥協はしない」、そのための何重もの安全対策が講じられていることなど説明がされた。
- ・津波・地震から守るための策として、衝撃や浸水を防ぐため、15mの津波を想定した「防潮堤」の設置、建屋周辺には「防潮壁」「防潮板」の設置、緊急時に原子炉を冷却する装置や非常用電源がある重要エリアには「水密扉」を採用するな

どして浸水を防ぐための措置がはかられていた。

- ・また電源を絶やさないための策として「代替電源」を複数設置、特に空冷式ガスタービン発電機車や電源車などを津波の影響を受けない場所に分散配置されていた。
- ・原子炉を冷やし続けるための策としては、消防車や貯水池を構内に配置するなど、万が一、発電所がすべての電源を失い、電動の注水設備が使用できなくなった場合の備えとして用意されていた。
- ・放射性物質の放出を抑制するための備えとして、フィルターベント設備を設置し、原子炉格納容器に放射性物質を含むガスが滞留すると内圧が徐々に上昇してしまう事態が発生してしまうため、溜まったガスを、フィルターベント設備を通して大気に逃がす措置をとることで、粒子状放射性物質の99.9%以上を除去することができる。この設備は、東日本大震災後、6号機、7号機に備えており、今回6号機の視察を行なったが、原子炉建屋最上階に設置されていることが確認できた。

### ■視察および表敬訪問を終えて

- ・柏崎市 櫻井雅浩市長、刈羽村 総務課 鈴木裕市課長との面会で、資源小国である日本の将来、モノづくり産業の未来を考えた時、安全で安定したエネルギーが必要であるということ、また、市・村にとっての経済を支えていくうえで、柏崎刈羽原子力発電所の再稼働が必要であり、喫緊の課題であることを理解した。併せて、再稼働させるために、櫻井市長、品田村長が、新潟県知事に対し、「早期の決断」を求めていることも理解した。
- ・今回、柏崎市訪問、また、櫻井市長との面会にあたっては、東京電力労働組合 組織内議員である柏崎市議会議員 相澤宗一様にご尽力いただいたことに感謝したい。
- ・KAKKINとしても、活動の3本柱の一つ、「原子力の平和利用推進」のもと、安全性が担保されている発電所として、早期の再稼働を望むものである。

### 第66回全国代表者会議

#### ◇ 開催案内 ◇

- 開催日 令和8年1月30日(金) 14時00分～17時00分
- 開催場所 東京グランドホテル 桜の間
- 開催内容 令和7年度活動報告・会計監査報告  
令和8年度活動の基調・具体的な取り組み  
令和8年度予算・役員

# KAKKIN 活動の原点と日本のエネルギー問題を考える

## 令和7年度第2回研修会を開催

KAKKINは11月25日(火)、友愛会館においてエネルギーと経済・環境を考える会と共催で研修会を開催した。講演Ⅰでは、「核兵器は安上がり」論から原子力平和利用の途へ」の話を、また講演Ⅱでは、「放射線被ばくと健康影響」について話を聞いた。以下は2つの講演の要旨である(参加70名)。



### 「核兵器は安上がり」論から原子力平和利用の途へ

講師：真下 英二氏  
KAKKIN 常任理事  
尚美学園大学総合政策学部教授

#### 「核兵器は安上がり」の真意と背景を考える

##### 1. 「核兵器は安上がり」論とは

- ・2025年7月参議院選挙期間中、参政党の候補者が「核兵器は安上がり」と発言したことで、SNSでは賛否の議論がなされることになった。
- ・核廃絶を支持しながらも、核兵器を保有することで自国の安全を確保したいとする国民が一定数いることも見て取れる。
- ・核兵器を容認する声が「隠れた形で」存続するのはなぜかを考えていく必要がある。

##### 2. 「核兵器に対する認識」<先細る「原爆教育」>

- ・中学生の「原爆教育、生徒全員、冷笑しなくてももう二度

としたいくない」とのXでの投稿に約4,000万の表示があり話題になった。

- ・90年代以降「核兵器」に関する映画などのコンテンツがなくなってきていると感じる。
- ・若い人たちは恐ろしいことは知っていても、何が恐ろしいかについて正確に認識されていないのか、世代間の格差があるのではないのか。
- ・核兵器の恐ろしさを伝える方法には一工夫必要ではないのか。

##### 原子力平和利用のジレンマ

- ・(県民意識調査より) 原発の安全対策・防災対策に関する認知度が高くなるほど再稼働については肯定的な結果が出ている。
- ・本来、「原子の火」(原子力)は人類発展のために「平和利用」されなければならなかったのに、現実には殺傷兵器として使用されてしまった。

「原子力の平和利用こそがあるべき姿で、そのことをより明確にする必要がある。

- ・そのことを明確にしながらか「核廃絶」を目指していく必要があると考える。



### 放射線被ばくと健康影響

講師：高村 昇氏  
東日本大震災・原子力災害伝承館館長  
長崎大学原爆後障害医療研究所教授

「東日本大震災・原子力災害伝承館」のを行っている研究事業に対しKAKKINより寄付をいただき感謝を申し上げます。いただいた寄付金を活用しながら研究事業を進めています。

##### 1. 放射線・放射線被ばくとその特徴

基本的な知識として、放射性物質から出るのが放射線(単位はシーベルト)。放射性物質から放射線を出すエネルギーの能力が放射能(単位はベクレル)。我々、地球上の生物は毎日(毎時)、放射線に被ばくしている。宇宙からの宇宙線、食べ物からもカリウムなど放射線性物質を取り込んでいる。日本人は1年間で約2ミリシーベルトを被ばくしている。

外部被ばくは、レントゲン写真など外からの放射線を取り込むこと。内部被ばくは、放射性ヨウ素や放射性セシウムなどが入った食べ物や飲み物を摂取したことで取り込んだもの。

放射線量について、胸部X線で1枚撮ると約0.1ミリシーベルト、CT検査は1回5～10ミリシーベルトで、この線量では癌にはならない。100ミリシーベルト以上を一度に被ばくすると癌になるリスクが増える。

##### 2. 健康影響調査からわかったこと

原爆被爆地(広島、長崎)において、両県の被爆者約20万人に対して1950年代から健康影響調査が継続して行われ

ている。これによってわかったことは、原爆で被爆した線量が高いほど、がんになるリスクがあがるということ。

広島、長崎の原爆と比べて、福島での被ばく線量は平均0.7～0.8ミリシーベルト程度ときわめて低い100ミリシーベルトを下回るレベルの線量についてはがんのリスクが証明されていない。

また被ばく2世に放射線の影響が遺伝するという事は証明されていない。

##### 3. 東京電力福島第一原子力発電所事故

事故によって出された放射性物質はチェルノブイリと比べて福島は約7分の1。

福島の事故では、迅速な避難指示によって外部被ばく線量を減らし、食物の暫定規制値を設定し流通制限、接種制限が行われた。

福島での処理水の問題、1500ベクレルまで薄めて海洋に放出しているが、がんリスクの100ミリシーベルトになるには、毎日2Lの水を飲み続け1000年かかるレベル。

##### 4. 伝承館の紹介

伝承館は原発から4kmの双葉町に2020年9月に設立された。目的は原子力を含む複合災害の記録、記憶、教訓を収集して、将来の防災・減災につなげること。

広島、長崎での原爆やチェルノブイリ事故での経験から、福島第一原発事故では被ばく線量の軽減が図ることができた。放射線はむやみに恐れるのではなく「正しく恐がること」が必要、これが福島の大きな教訓。福島の経験を世界の防災・減災のためにも未来に繋ぎたくてはならない。

これからも伝承館はその役割を担っていききたい。

発行 **核兵器廃絶・平和建設国民会議**

〒105-0014 東京都港区芝2-20-12 友愛会館8階  
Tel.03-3454-3461 Fax.03-3457-5280

・発行責任者 渡邊 啓貴 ・編集者 谷川 文朗

Facebook 核兵器廃絶・平和建設国民会議のページ



KAKKIN ホームページ



YouTube KAKKIN チャンネル

